

# 前庭をともなう古墳の編年

## ——赤城山南麓における後期群集墳の動向——

鹿 田 雄 三

### は じ め に

赤城山の南麓で、前橋市東部に位置するかつての荒砥村は、現在も地域単位としてのまとまりをもっている。この地域は、前二子古墳・後二子古墳、そして中二子古墳などの大前方後円墳で構成される大室古墳群の存在によって、学史の上でも著名なところである。また、昭和10(1935)年におこなわれた古墳の分布調査では、365基の古墳が記録された古墳密集地帯としても知られる地域である。近年では、圃場整備事業や道路・工場や住宅団地の建設にともなう発掘調査が激増し、古墳や集落遺跡などおびただしい発掘資料の集積がみられる。<sup>\*1</sup> この間調査された古墳は、およそ257基であった。

ところで、調査された257余基の古墳のうち、横穴式石室開口部前に前庭をともなうものが114基で、調査古墳のおよそ半数弱にあたる。当地域の古墳築造のピークは、竪穴系の古墳では5世紀後半から6世紀前半にかけて、横穴系では6世紀後半に、そして前庭をともなうものが7世紀中葉以降の三つの時期があるという理解が一般的である。調査の結果は7世紀中葉以降のピークが最大のものだったことになる。

5・6世紀代の古墳は、主体部・遺物・埴輪・降下テフラなどから、その古墳の年代観を導きだすことが可能である。7世紀代のものは、遺物が少なくこれも追葬などの可能性が高く、しかも主体部の変化も少ないことなどから、編年作業に困難をきたしていた。7世紀代の古墳の動向、なかでも古墳時代の終末の様相を分析するには、この時期の古墳の編年を設定することが不可欠な作業である。

筆者は、かつて「赤城山南麓における群集墳成立過程の分析—群馬県伊勢崎市蟹沼東古墳群を中心にして—」<sup>\*3</sup> で、横穴式石室の導入期から、前庭の出現・終末までの変遷を一つの古墳群の中でみることをおこなった。本稿では、この分析成果をもとにしながら、荒砥地域と同地域に隣接している、佐波郡赤堀町・勢多郡粕川村の資料をもちいて、赤城山南麓の前庭をともなう古墳の編年をおこない、7世紀代の後期群集墳の分析視点や問題点を摘出することを目的としている。

なお、本稿に用いる資料は報告書の刊行がなされているものに限られた。また、分析をすすめるにあたり、前庭の名称を設定しておきたい。前庭にむかって正面にあたる羨門(石室開口部前)の左右に積まれた石壁は「羨門袖壁」とし、羨門袖壁へ直角あるいは鈍角にまじわる石壁を「羨門袖側壁」とする。前庭の平面形は一般に台形を呈するものが多いが、台形上辺の中央部に羨門が開口し、この左右上辺が羨門袖壁、台形の斜辺が羨門袖側壁となる。古墳の規模は断りのない限り墳丘15mと示し、周堀の内径であらわしている。

土器の年代設定にあたっては坂口 一氏の年代観を基準にして、西原古墳群については小島純一氏に二之堰古墳群については徳江秀夫氏のご教示によった。

### 1. 赤城山南麓と古墳群

赤城山は広大な裾野を形成しているが、南麓の規模は特に大きい。標高500m前後に山地帯から丘陵性台地への地形変換がうかがわれ、200m以下の地域は比高の少ない低台地となっている。この中には、赤城山給源の泥流が堆積した「流れ山」などと呼ばれる泥流丘がある。南麓の末端は、旧利根川の崖線によって区切られ、氾濫原の沖積地に接している。また、南麓を流下する河川は



1. 蟹沼東古墳群
2. 地藏山古墳群
3. 峯岸山古墳群
4. 西原古墳群
5. 二之堰古墳群
6. 阿久山古墳群
7. 天神古墳群
8. 伊勢山古墳群
9. 谷津古墳群
10. 熊の穴古墳群
11. 諏訪西遺跡
12. 柳久保遺跡
13. 荒砥下押切II遺跡
14. 荒砥北原遺跡
15. 荒砥宮田遺跡
16. 向原遺跡
17. 前二子・中二子・後二子古墳

図1 赤城山南麓の本稿掲載古墳群分布図

台地を樹枝状に開析するとともに、低台地付近にある湧水から的小支流などによって、台地と沖積地が複雑に入り組む地形となっている。

この台地、特に縁辺では最近の調査で居住域の調査が進み、沖積地では水田など生産域調査の類例も増加している。また、台地や流れ山には、第1図のように顕著な古墳の分布がみられる。本稿では、下記の古墳群を抽出して分析することにする。

なお、古墳群の分布とその様相について、いくつかの試論が提示されているが、ここでは年代を基本にした大まかなものでおこなっておきたい。<sup>\*4</sup>

《5世紀から築造がはじまった古墳群》 佐波郡赤堀町地蔵山古墳群・峯岸山古墳群

伊勢崎市蟹沼東古墳群

《6世紀から築造がはじまった古墳群》 勢多郡粕川村西原古墳群

《7世紀から築造がはじまった古墳群》 前橋市二之堰古墳群

**地蔵山古墳群** 南麓末端にある標高98.9mの流れ山の東・南・西斜面に形成されている。地蔵山・達磨山・蕨手塚古墳などの帆立貝形前方後円墳や大型円墳など5世紀代の古墳を中心として、6世紀後半の大型前方後円墳である五目牛二子山古墳をふくみ、7世紀代まで構築されている。総数55基のうち、発掘調査された43基は、堅穴系のもの16基、横穴系のもの24基、不明3基である。<sup>\*5</sup> このうち、前庭をともなう古墳は、南斜面から西斜面にかけて14基発掘調査された。

**峯岸山古墳群** 赤堀町と新里村にまたがる標高168.3mの流れ山の南斜面を中心に形成された古墳群である。5～7世紀にわたる56基の古墳があり、帆立貝式古墳4基を含む30基が調査された。<sup>\*6</sup> このうち堅穴系のもの12基、横穴系のもの16基のうち前庭をともなう古墳は5基であった。

**蟹沼東古墳群** 地蔵山古墳群の西側にある沖積地をはさんで位置し、地蔵山より規模が小さく斜度のゆるい標高96mの流れ山の全面に古墳が展開する。この古墳群は総数80～100基前後とみられるが、すでに削平されたものも多い。帆立貝式古墳もふくめ前方後円墳はない。69基が発掘調査されたが、5世紀代のものは1基だけで、大半のものは6～7世紀代であった。堅穴系が2基、横穴系が67基で圧倒的に多い。<sup>\*7</sup> このうち前庭をともなうものは35基である。

**西原古墳群** 標高155～167m前後の丘陵地帯の東南斜面に形成された総数18基あまりの古墳群で、15基が調査された。堅穴系のものはない。横穴系の帆立貝形前方後円墳1基をのぞいて、すべて前庭をともなう。<sup>\*8</sup>

**二之堰古墳群** 標高87～91m前後の低台地の東南斜面に分布する総数21基の古墳群で、そのすべてが発掘調査され、すべて前庭をともなっていた。<sup>\*9</sup>

前庭の型式変遷の分析については、松本浩一らによって石室の胴張り・玄門・前庭に注目した分析が試みられてきたが、結論的なものを導きだすまでにはいたらなかった。<sup>\*10</sup> その後、徳江秀夫は二之堰古墳群の分析で、周堀の変化に着目し、その変遷を、「周堀全周 → 周堀一部 → 周堀なし」と三分類・編年した。前橋市教育委員会調査の熊の穴古墳群の報告でも徳江の分類・編年を踏襲している。<sup>\*11</sup>

## 2. 蟹沼東古墳群での型式と編年

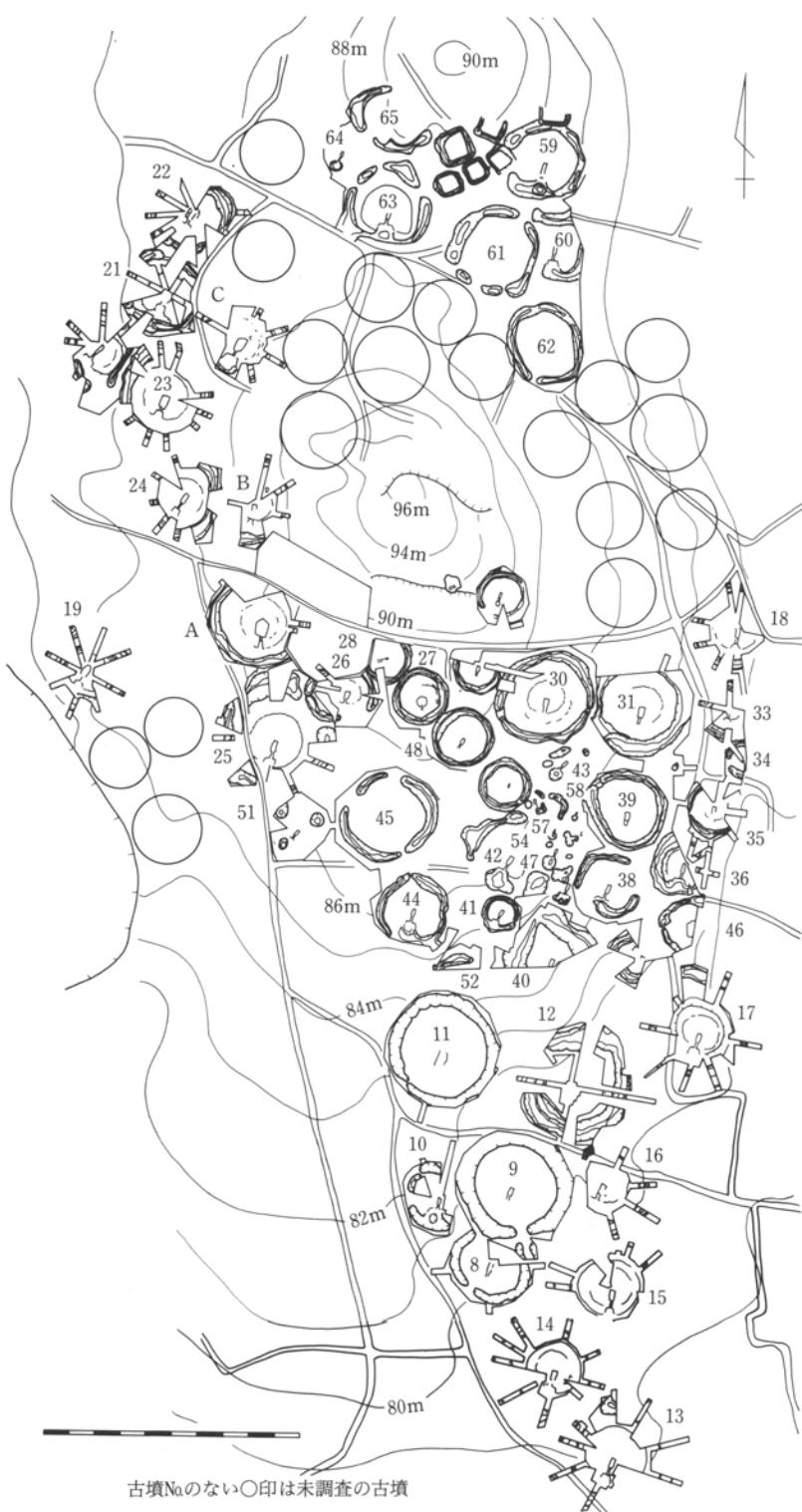


図2 蟹沼東古墳群

\*<sup>12</sup> 拙稿では、周堀の関係による編年を基ととして、以下について分析した。

- ・周堀の形状（正円にめぐるもの → 部分・不正円形のもの → 堀なし）
  - ・前庭の形状（多種多様な前庭 → 台形の定型的前庭 → 前庭を掘りこむ → 掘りこむだけ）
  - ・石室構築方法（地山整地・竪穴掘りこみ → 竪穴掘りこみ）
  - ・主体部形状（狭長・袖無・羨道短 → 不整形な矩形 → ほぼ矩形）
  - ・玄門の形状（段積 → 不整角柱状 → 角柱状）
  - ・石室開口部と玄室床面との比高（降りこみ・段差のあるもの → 平坦なもの）
- これらの要素は、前庭が定型的なものとして定着する7世紀中葉になると、石室構築方法では竪穴

を掘りこんで石室をつくり、主体部はほぼ矩形なもので、石室開口部と玄室床面との比高もほぼ平坦となる。玄門も、石室の遺存状態の良いものでなければ残らないから、7世紀代の古墳編年をおこなう時、「周堀と前庭の形状」を中心としておこなうことが、現在の資料や遺構の状況からしても妥当と考えられる。

ここでは、拙稿の編年作業をさらに進めるため、周堀と前庭の形状によってI～V期の5型式に細分し、7世紀代の古墳の編年をさらに推し進めていきたい。

**I期** A・B・16・15・17・18・25・26号墳。前庭の出現期にあたり、墓道状のもの（A号墳）・葺石を直線状にして羨門袖壁をつみ平坦な前庭を設けるもの（16・26号墳）・羨門袖壁と羨門袖側壁を積んで台形状の前庭を造るもの（15・17・18・25号墳）がある。A・15・17・25号墳には、埴輪がともない一部を除きすべて30mをこえる規模をもっている。前庭の設置という新しい葬法が、古墳群の中でもその規模の大きいものに採用されていったのである。周堀はほぼ円に近くめぐり、前庭はこの周堀から一段あがった地点に墳丘にわりこむかたちで平坦に造られる。台形状の前庭は、羨門袖壁部分のはりだしが短い。また、羨門袖側壁が、羨門袖壁より長い。

墓道状のものと、羨門袖壁だけを設置するものは、II期へ続かないから、台形状の前庭のものと別の系譜から出てきたものと考えられる。

**II期** 13・14・19・20・22・23・24・33・35号墳。墳丘規模はI期に比べると縮小しているが、30mをこえるもの（13・14号墳）、20mをこえるもの（19・20・22・23・24号墳）とあり、規模の大きいものに前庭が設置される様相は変わっていない。20m以下のもの（33・35号墳）でも35号墳は、羨道もふくめ全長480cmあり、玄室長が300cmをこえることは確実である。

周堀は、不整形ながら全周している。墓道状のものや羨門袖壁で平坦な前庭とするものではなく、前庭の形のバラエティはなくなる。羨門袖壁と羨門袖側壁をともなった定型的な平面台形状の前庭だけになる。I期に比べて、羨門袖壁が長くなり、これに交わる羨門袖側壁が逆に短くなる。交わる角度も直角に近いものになってくる。周堀と前庭の関係はI期と同じで、羨門へむけてテラス状に平坦につくられている。ここに敷石をほどこしたもの（13号墳）もある。

全般にI期の特徴を引き継いでいるが、墳丘と前庭が整合性をもって造られるようになったといえる。玄室も矩形のものに安定し、玄門も不整形な角柱状の立石で設置するものもでてくる。

**III期** 36・38・41・44・59・63号墳。周堀は不整形でめぐるが、途切れ「けつ」状のものが多くなる。墳丘の縮小化がすすみ、30mをこえるものはなくなる。墳丘10m前後のもので玄室も300cmをこえない規模の小さなものが現れる。

前庭も変わり、II期までは前庭と周堀が段差をもって区分されていたが、ここで周堀と一体につくられるようになり、前庭だけ周堀と分離して掘りこむものもでてくる。II期では、前庭と石室床面は比高がなく平坦となっていたが、ここでは前庭から一段あがって、石室床面に達することになり、前庭底面は周堀底面に近い高さになる。羨門袖壁が左右に長くなり、これに交わる羨門袖側壁が短くなる。前庭を掘りこみ、羨門袖側壁のないものもでてくる。

		I 期 6世紀後半～ 7世紀初		II 期 7世紀前半	III 期 7世紀中～後半	IV 期 7世紀後半	V 期 7世紀末
周堀の新状	完周・円形	---		---	---		
	部分 ・不整円形	—	.	—	—	—	—
前庭	墓道状	—	A				
	羨道袖壁	—	16			47	
	羨道袖壁と 羨道袖側壁	15		20		43	
	前庭掘り こみのみ					54	
石室構築	地山整地				25		
	豎穴 掘りこみ	36					
主体部	不定形な 矩形		16				
	ほぼ矩形					10	
	小石櫛		25			54	
玄門	段積み	—					
	不整角柱状	24					
	角柱状			43			

表1 前庭をともなう古墳型式編年一覧 (数字は古墳のNo.)

石室も地山を整地して造るもののがなくなり、豎穴を掘りこむようになる。不整な角柱状の立石で玄門とするものが多くなる。

墳丘の縮小化とともに、すべての分野で簡略化する傾向がはっきりとしてくる。

**IV期** 10・42・43・47・60号墳。周堀が全周するものはなくなり、不整形に一部が掘られるだけになる。墳丘も10m前後のものが多くなるが、10・42号墳のように20mに達するものもあり、やや大型のものと小型のものがみられる。前庭も、周堀よりさらに深く掘りこまれようになる。その底部は隅丸の台形や方形を意識したものが多い。羨門袖側壁は縮小し一部ではなくなり、前庭の区画は掘りこみによってなされている。玄室はそれぞれ250cm前後の規模で、42号墳は330cmである。角柱状立石で玄門とするものがでてくる。

V期 53・54・56・57・64号墳。明瞭な周堀は設けられず、前庭のみ掘りこまれ、底部は円形に近く台形状を意識していない。羨門袖壁はわずかに残り、羨門袖側壁はない。横穴式両袖型の形式は保たれているが、玄室は小型化し、300cmをこえるものはない。中には石室機能が退化し、石櫛状（袖無型に近い）のものもある。

I～V期の年代 I期は埴輪をともなうことや土器の様相から、6世紀後半～7世紀初頭と考えられる。II期に7世紀前半の土器はみられず、いずれも中葉以降の様相を示すので、7世紀中葉が妥当であろう。III・IV・V期の土器は、7世紀中葉から後半の時期を示しているが、この中で積極的に細分できるものではない。そこで、古墳時代の終末を7世紀代とする一般的理解にたち、V期を7世紀末、III期を7世紀中～後半、IV期を後半としておきたい。

### 3. 各古墳群での型式と編年

蟹沼東古墳群で前庭をともなう古墳をI～V期に編年したが、この分類が他の古墳群でも当てはまるのかどうか、各古墳群のうちの代表的なものを選択抽出して検討してみたい。なお各古墳群の分析で、墳丘が破壊され時期の不明なものについては割愛した。墳丘図や石室展開図などについては、紙面の都合上掲載できないので、( )内に掲載報告書挿図・図版名を記すこととする。

地蔵山古墳群 前庭をともなう古墳は14基であった。<sup>\*13</sup>

I・II期に該当する古墳はない。

III期のうち赤堀村4号墳は、地蔵山の南西斜面の低い位置で墳丘は約22.5mである（報告書2第69図）。周堀は前庭部を残して「けつ」状に不整形にめぐる。前庭は、浅く隅丸台形状に掘られて周堀から区画され、小礫を敷き詰めた部分があった。7世紀中～後半の土師器が出土している（報告書2第71図）。羨門袖壁に交わる羨門袖側壁は、右壁が直角にちかく左壁は鈍角で交わっている。石室は破壊されていたが根石が残り、玄室長は321cmのほぼ矩形で、玄門は根石を直立させこの上に数石段積している（報告書2第70図）。なお、玄室から5体の人骨とT字棒1直刀1小刀1刀子4鉢2石突2斧1鑑1耳環2鉄鏃9金具・釘などが出土した。

赤堀村3号墳もほぼ同じ様相を示すが、前庭がさらに一段掘り下げられ、すぐに埋めもどされた様子があった（報告書2第76図）。

漏五目牛5号墳も赤堀村3・4号墳に近いが、羨門袖側壁がなく、掘りこみによって前庭を区画している（報告書1第29図）。これに近いものが、赤堀村19号墳である（報告書2第20図）。赤堀村3・4号墳はいずれも20m前後の墳丘をもち、漏五目牛5号墳は墳丘15mであるが300cm規模の石室をもち、赤堀村19号墳は墳丘・石室ともにこの規模に達しない。

IV期として分類した赤堀村5号墳は、地蔵山の南西斜面にあり、赤堀村4号墳を避けてつくられ、墳丘約11.7mである（報告書2第73図）。前庭から7世紀後半の土師器が出土している。（報告書2第75図）玄室は破壊されていたが、根石が残り長さ427cm、5体以上の人骨・直刀1小刀1銀金具・耳環1が出土した。周堀は、石室奥壁の背後の位置（北東側）で1/4周ほど掘られるだけで

ある。前庭は、羨門袖側壁で区画された部分を掘り、その中央部をもう一段掘り下げている。玄室は破壊されていたが、根石が残り長さ427cm、5体以上の人骨・直刀1小刀1銀金具・耳環1が出土した（報告書2第74図）。これに類似するのは、玄室長300cmの赤堀村18号墳で、この前庭も前庭底面から掘り下げられた部分があり、底部から土器が出土している（報告書2第17図）。

赤堀村17号墳は、L字形の玄室をもち、周堀は18号墳に類似するが、前庭は平坦で一段深く掘り下げられてはいない（報告書2第23図）。18号墳の周堀を避けているから、18号より新しいのがさほどの時期差はないものと考えられる。

赤堀村5・18号墳よりも規模が小さくなり類似しているのが、漏五目牛1（報告書1第6・7図）・2号墳（報告書1第9・10図）である。墳丘10m前後で、玄室200cmほどである。両者とも羨門袖側壁はない。

V期に分類した漏五目牛27号墳は、地蔵山の南西斜面の中位にあり墳丘約7.6mで（報告書2第23図）、前庭から糸切り底の土師器などが出土した。周堀は半周に近くめぐり、前庭は平坦な部分からさらに一段掘り下げられている。羨門袖側壁はない。羨門・玄門ともに立石でつくるが石室のつくりが粗雑で簡略化の傾向が強い。玄室の規模は200cm前後である。これらの様相は最終末のも



図3 地蔵山古墳群

ので、漏五目牛26号墳もこれに類似する（報告書2第66図）。漏五目牛16（報告書2第30図）・25号墳（報告書2第61図）とともに、墳丘規模は漏五目牛26・27号墳の半分に、石室規模は3分の2となっている。同時期と考えられる。漏五目牛19号墳は、主体部が完全に破壊されているため不明であるがその規模は200cmにも満たないもの（報告書2第28図）、前庭のみを掘りこむ様相は、漏五目牛16・25号墳と同じものである。これらがいずれも発掘調査によって新しく発見されたことは、当初から墳丘も低く小規模であることに起因しているのだろう。

以上をまとめると下記のようになる。

I期	なし
II期	なし
III期	赤堀村3・4・19号墳・漏五目牛5号墳
IV期	赤堀村5・17・18号墳・漏五目牛1・2号墳
V期	漏五目牛16・19・25・26・27号墳

**峯岸山古墳群** 前庭をともなう古墳は6基であった。

I期に分類した漏峯岸山12号墳は峯岸山の西斜面に、漏峯岸山1号墳は南々西斜面に、漏峯岸山11号墳は南斜面のそれぞれ高位に位置する。漏峯岸山12号墳は33mの規模（報告書2第12図）、前庭部から6世紀後半の土師器甕・壺が出ている（報告書2第15図）。前庭は、山石の割石と河原石を平坦なテラス状に敷きつめて区画している。羨門袖壁は設けない。袖無型石室にはTK43併行の須恵器提瓶・壺のほか、刀子1銀銅環2鉄鏃2金具3などが出土している（報告書2第14図）。漏峯岸山11号墳は、23.2mの規模（報告書2第7図）、袖無型石室で直線を意識した羨門袖壁を設け、平坦な前庭を区画している。漏峯岸山1号墳は、19.5m規模で袖無型石室をもつもの（報告書1第14図）、漏11号墳に近い前庭をともなっている。

赤堀村287・291号墳は、峯岸山南西斜面の低位にある、それぞれ9.6m（報告書1第38図）・14m（報告書1第30図）の規模の古墳である。赤堀村287号墳は袖無型石室で、小刀1青銅環2鉄鏃10、6世紀末から7世紀初の須恵器壺などが、出土している（報告書1第31図）。石室開口部と羨道・玄室部に若干の段差をもっている。この石室開口部に接続して、玄室・羨道と同じ幅の墓道状前庭がつくられている。赤堀村291号墳もほぼ同様な前庭が設置されているが、石室構築後に設置されたことがわかっている（報告書1第31図）。

なお、赤堀村287号墳の周堀は、赤堀村291号墳のそれと近接しているが、破壊せず避けているので、赤堀村287号墳の方が新しいことになる。

II・III期は該当がない。

IV期に分類した漏峯岸山10号墳は、峯岸山南斜面の低位にある。周堀は、北から南東側にかけては明瞭に掘りこまれているが、西および南側はこの古墳より古い住居跡や道路状の遺構などもあってはっきりとしない（報告書1第67図）。羨門袖壁と羨門袖側壁とで前庭を区画し、中央部でさらに掘り下げられている。前庭と周堀との関係は明確でないが、前庭の掘り下げた部分を周堀

と共に用させていることも、考えられる。主体部は横穴式両袖型石室で、奥壁・玄門・羨門はそれぞれ削石をもちいている(報告書1第68図)。周堀・前庭の様相は、蟹沼東古墳群のIII期であるが、石室はIV期である。周堀と前庭は不明なところがあるので、ここではIV期としておく。

以上を整理すると、下記のようになる。

I期 漏峯岸山1・11・12号墳 赤堀村287・291号墳

II期 なし

III期 なし

IV期 漏峯岸山10号墳

V期 なし

西原古墳群 前庭をともなう古墳は、15基中、14基であった。

III期に分類したF4号墳は、南東斜面の低位にあり、墳丘21m、周堀は不整形ながら全周している(報告書第20図)。羨門袖壁・羨門袖側壁はない。前庭は周堀を一段掘り下げて区画し、さらに中央左よりの部分を下げている。この部分より7世紀後半の土師器壺が出土した(報告書第22・23・24図)。また、西側の周堀の一部も同様に周囲より一段下げられていた。

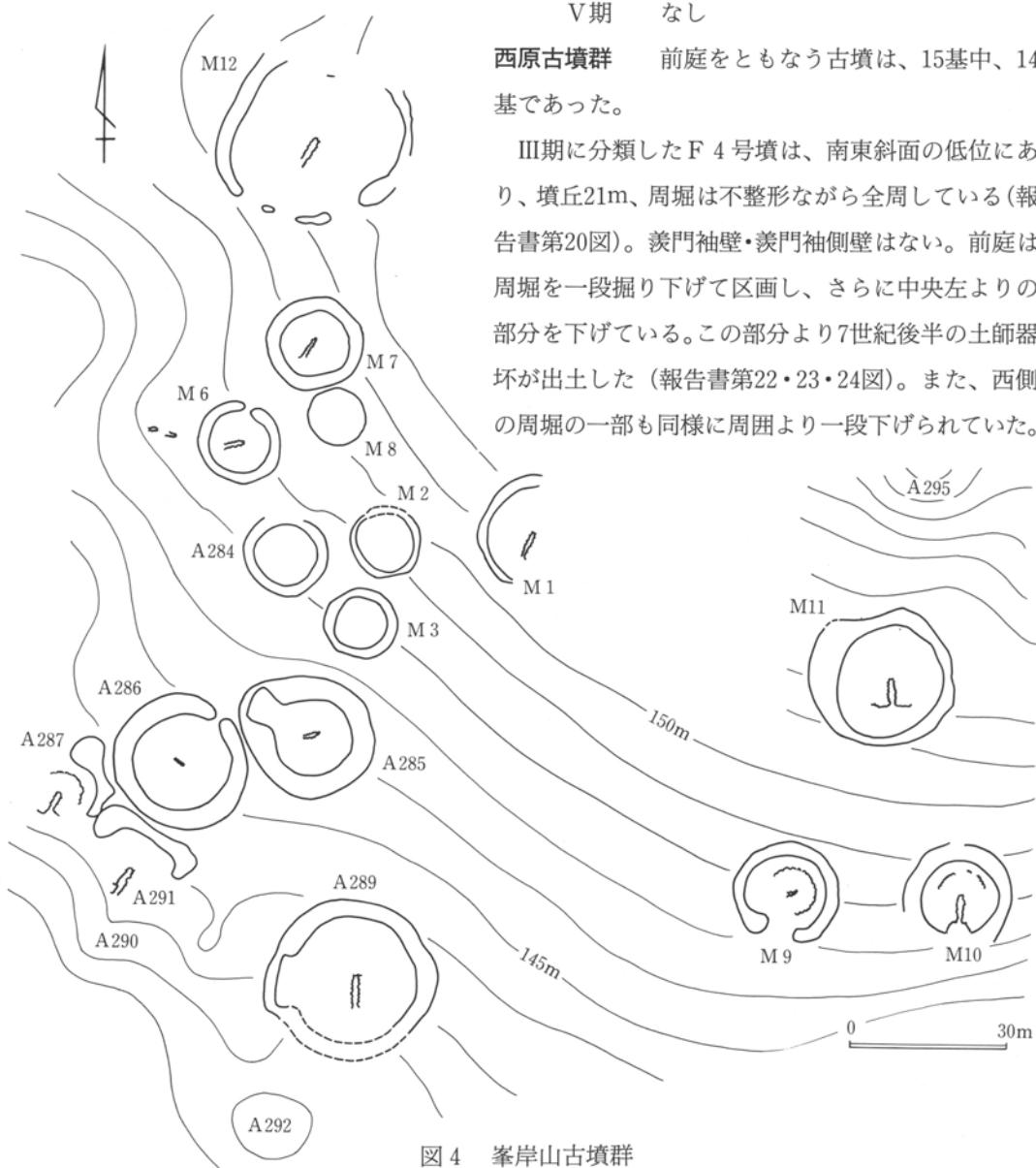


図4 峯岸山古墳群

玄室からは、直刀 2 金環 2 鉄鏃が出土した。F 4 号墳に近接した F 2 号墳は、前庭を掘り残した「けつ」状の不整形な周堀がめぐる。墳丘は23mである。前庭は、だ円形に掘り下げる区画した部分をさらに一段下げる（報告書第13図）。この底面から飛燕形に近い鉄鏃が出土した（報告書第15図）。羨門袖壁が残存している。

F 2・4 号墳よりさらに低位にある墳丘18.4mの I 3 号墳（報告書第36図）と17.3mの D 1 号墳（報告書第46図）とも、東南部の周堀を「けつ」状に掘り残し、前庭は周堀とつなげられている。I 3 号墳の前庭は、さらに掘り下げる（報告書第16図）。前庭は、台形を意識した形状である。D 1 号墳は羨門袖壁・羨門袖側壁ともなく、I 3 号墳には、両者ともに設置されている。両者ともに前庭より、7世紀後半の土師器壺が出土している（報告書第39図）。

IV期に分類した F 3 号墳は、F 2 号墳を避けて F 4 号墳の北側のスペースにつくられ、17m前後の墳丘をもち、北東側1/4の周堀がない古墳である。前庭は、羨門袖壁と羨門袖側壁で区画され、中央部はさらに掘り下げる（報告書第16図）。7世紀中～後半の土師器壺が出土した（報告書第18図）。玄門は、角柱状の石を立ててもちいている。F 5 号墳も墳丘12mで周堀も半周しか

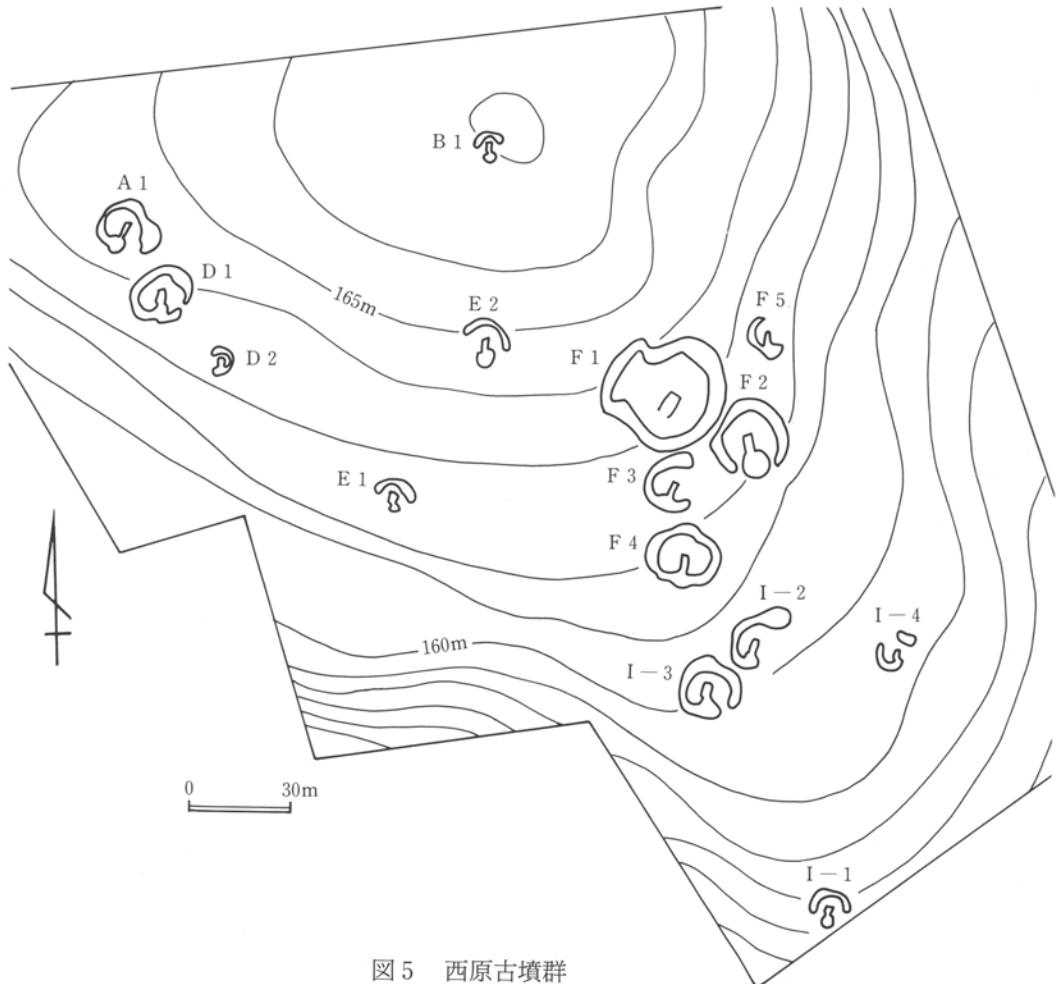


図5 西原古墳群

掘られず、前庭の部分はさらに下げられる（報告書第27図）。ここから7世紀後半の土師器壙が出ている（報告書第29図）。羨門袖壁と羨門袖側壁ともにない。A 1号墳も墳丘18.9mで南東側を掘り残した周堀をともない、北東側でさらに一段掘り下げられ、前庭などはF 5号墳に類する（報告書第42図）。I 2号墳の周堀は、北から西側にかけて掘られているが、円を意識していない（報告書第33図）。前庭は西南側の周堀から浅くつづき、中央部が掘り下げられている。7世紀後半の土師器壙が出ている（報告書第35図）。羨門袖壁はあるが、羨門袖側壁はない。

V期に分類したE 2号墳は、南斜面の高位にある、墳丘14.8mの小規模な古墳である。周堀も浅く北側を中心に半周するだけである。前庭は円形の掘りこみで区画している（報告書第54図）。石室は2mに達しないものであるが、玄門は角柱状の石を立てている。石室比1.9前後の矩形で短い羨道がつき、羨門袖壁がある（報告書第54図）。E 1号墳も墳丘11.8m、2m弱の玄室、浅く半周する周堀、掘りこみだけの前庭などE 2号墳に共通する（報告書第51図）。

I 4号墳は、墳丘10m、周堀も浅く部分的にしかなく、前庭を円形に掘りこんでいる（報告書第40図）。玄門も省略された袖無型に近い形状で、一体を埋葬するにも事欠く156cmの玄室である。角柱状の立石を羨門としている（報告書第41図）。B 1・D 2・I 1号墳ともに同じ内容である。以上をまとめると下記のようになる。

I期	なし
II期	なし
III期	D 1・F 2・F 4・I 3号墳
IV期	A 1・F 3・F 5・I 2号墳
V期	B 1・D 2・E 1・E 2・I 1・I 4号墳

**二之壙古墳群** 21基のすべてが前庭をともなっていた。

III期に分類した14号墳は、古墳群の東端にあり、墳丘13mで、周堀はほぼ円形にめぐる。前庭は周堀と共に用した部分を一段掘り下げている（報告書第224図）。羨門袖壁と短い羨門袖側壁がある。角礫を立てて玄門とした玄室は、285cmの長さがある（報告書第225図）。墳丘22.6mの4号墳は、ほぼ円形の周堀に、これと共に用した前庭があるが、14号墳のように前庭をさらに一段掘りこんでいる（報告書第201図）。玄室は322cmの長さがある（報告書第202図）。7号墳は、墳丘15m、北側を掘り残した「けつ」状で、前庭と共に用する周堀をもつ。前庭の左よりの部分が、一段深く下げられている（報告書第207図）。角礫を立てて羨門とし、羨門袖壁をともなう。玄室長273cmである（報告書第208図）。

IV期に分類した12号墳は、古墳群の北端にあり、墳丘19.6mの規模で、北側の周堀だけ掘られている。左右に長い羨門袖壁と短い羨門袖側壁で区画された前庭がある（報告書第220図）。ここから7世紀後半の土師器壙が出土している（報告書241）。玄室は243cmの長さがある。3号墳は、墳丘25m前後の規模があり、前庭の左右と北側にだけ周堀を設けている。前庭は、周堀と共に用し、角柱状の立石で羨門とし、羨門袖壁をもっている（報告書第198図）。玄室は346cmの長さがある（報

告書第199図)。7世紀後半の中でも新しい土師器壙が出ていている(報告書第240・241図)。6・13号墳は、周堀・前庭・玄室の形状・規模とともに3号墳に近いものをもっている。

なお、3号墳は4号墳の周堀を避けているから、4号墳より新しい。

V期の古墳は、すべてこれまでにつくられた古墳のあいだの空間に、つくられている。9号墳の周堀はなく、円形の前庭が掘りこまれている(報告書第212図)。柱状の立石で玄門としている。玄室は、長さ245cm、石室比1.6前後の定型的な矩形である。短い羨門袖壁はあるが、羨門袖側壁はない(報告書第214図)。1(報告書第194図)・8(報告書第209図)・11(報告書第215図)号墳とも同規模同形状であるが、11号墳だけは羨門袖側壁をともなっている。17号墳の周堀はなく、前庭だけ掘られている。角柱状の立石で玄門とし、玄室規模は74×165cmで一体埋葬がやっとのものである(報告書第228図)。7世紀末～8世紀初の須恵器長頸壺が出土した(報告書第225図)。18号墳もこれに類する。

15号墳は、35×220cmの袖無型の石室で浅い前庭があるだけで(報告書第227図)、16号墳も類する。

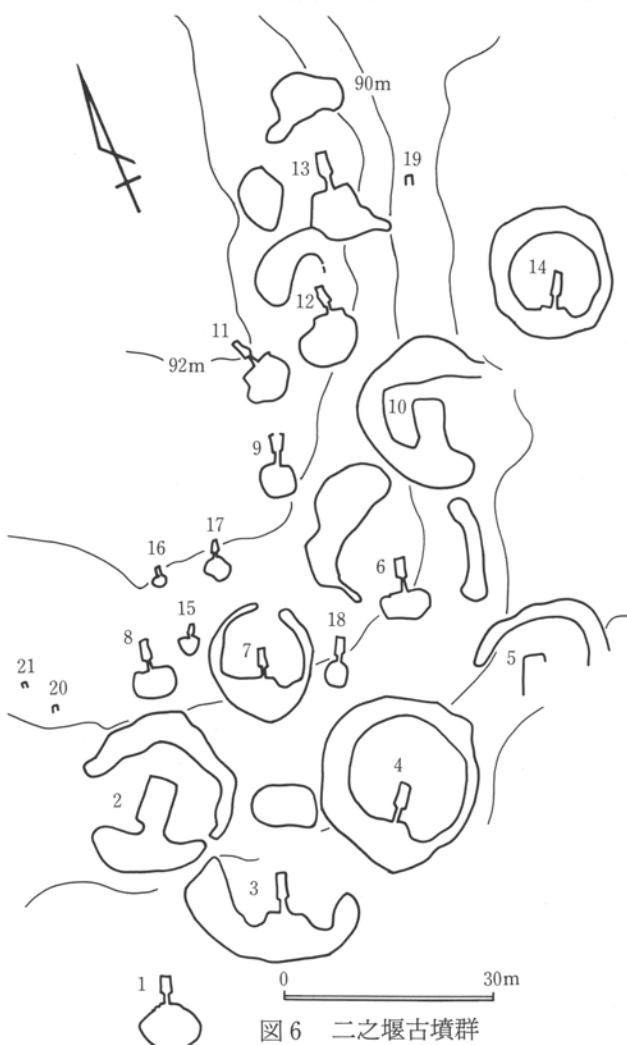
21号墳は、前庭状の浅い掘りこみに開口する部分の石を立てて、羨門を意識したつくり方をした19×30cmの横穴式石室である（報告書第235図）。

以上をまとめると下記のようになる。

I期	なし
II期	なし
III期	4・7・14号墳
IV期	3・6・12・13号墳
V期	1・8・9・11・15・ 16・17・18・21号墳

#### 4. 周堀と前庭の型式編年

この地域の前庭をともなう古墳を、  
蟹沼東古墳群のⅠ～Ⅴ期分類に当ては  
めてみると、各古墳群とも同一の傾向  
をもちながらバラエティーがあること  
がわかった。各古墳群の特徴を摘出し、  
各期の特徴点をまとめた。これを一覧  
表にしたものが第2表である。以下に、  
抽出できた特徴点をまとめておきたい。  
\*14



**I期** 前庭の導入期にあたるI期は、墓道状のもの・羨門袖壁だけのもの・羨門袖壁と羨門袖側壁で平面台形のものの3者が、横穴式石室開口部の施設として登場する。墓道状のものは蟹沼東古墳群で30m級の古墳に、峯岸山古墳群では10m級のものにみられるが、この時期だけで終わる。羨門袖壁を設けてテラスをつくるのは、蟹沼東古墳群で30m級のものに、峯岸山古墳群で20~30

古墳の規模	古墳群名	I期		II期		III期		IV期		V期	
		6世紀後半~7世紀初	7世紀前半	7世紀中	7世紀中~後半	7世紀後半	7世紀末				
20~30m 級の古墳 (玄室3m以上)	蟹沼東 古墳群 (Kは蟹沼 東を表示)	K16 KA KB(墓道状)	K26			K38 K14・24 19・22 K15 K25 K17 K18	K44 59 K13 K20 K33・35	K10 42 63 K36			
	地蔵山 古墳群	(Gは地蔵山 Aは赤堀村 Mは漏を表示)				GA 3 GA 4 GM 5		GA 5 GA18			
	二之堰 古墳群	(Nは二之堰)				N 4 N14	N 3 N12				
	西原 古墳群	(Nは西原)				NF 2・4					
	峯岸山 古墳群	MM1 MM11(石室崩 MM12 (Mは峯岸山次ぎのMは漏れ)									
	単独の 古墳					向原1号墳 荒砥北原1号墳					
III期以降で20m以下の墳丘でも玄室3m超のものは、20~30mの規模のものに分類した。墳丘規模縮小の中でも20~30mの古墳も玄室3m前後の規模なのでこのように分類した。アンダーラインのあるものが該当する。											
20m以下 の古墳	蟹沼東 古墳群					K47 K41	K43・60	K53・57 K64 K54・56			
	地蔵山 古墳群					GA19	GA17 GM1・2	GM26・27 GM16・25			
	二之堰 古墳群					N7		N1・8・9 N11 N17・18・21 N15・16			
	西原 古墳群					ND1 NI3	NF3・5 NA1・NI2	NE1・2・D2 NI1 NB1・NI4			
	峯岸山 古墳群	MA287(墓道状) MA291				MM10					
	単独の 古墳					荒砥下押切1号墳		荒砥宮田1号墳			

表2 前庭をともなう古墳の編年

m級のものに設置されている。羨門袖壁と羨門袖側壁を設けて台形の前庭をつくるのは、蟹沼東古墳群だけで20~30m級のものである。

峯岸山古墳群の墓道状の施設をともなうもの以外は、古墳群の中で大型の20~30m級のものに開口部の施設が設置されている。新しい葬制の導入にあたっては、古墳群の中でも20m・30mをこえる古墳など、小古墳の中の有力者層の墓にまずとりいれられたことをうかがわせる。また、平面台形状の前庭も、羨門袖壁が短く羨門袖側壁が長い特徴をもつもの、墳丘と前庭を整合的に結びつけるまでにいたらなかった前庭導入期の一つの特徴なのだろう。前庭は、墳丘に割り込んだ平坦なテラスとして設置されるので、前庭、羨道部、玄室へとフラットにはいることになる。

I期は、前庭の型式にパラエティーがあり、古墳群の中の大型のものに採用されている。

I期とII期の間には、およそ半世紀ほど古墳築造の空白がある。

**II期** 空白期間をはさんで始まるII期は、前庭のパラエティーがなくなり、羨門袖壁と羨門袖側壁とで台形の区画を造るものだけになる。このことは、前庭のさまざまな形態の中で、II期に継続された台形区画のものが、前庭の機能を最も表現する型式ということになる。

II期の古墳は蟹沼東古墳群だけにあり、15m前後のものも少数あるがいずれも石室規模300cm規模をもち、大半は20~30m級の規模である。この時期の古墳築造が、特定のものに限定されている様相がうかがえる。

前庭の型式は、周堀の形状・平面台形状の前庭・前庭から石室にフラットにはいることなど基本的にI期の特徴を引き継いでいる。台形の前庭も羨門袖壁と羨門袖側壁とのバランスもよく定型的なものになり、玄室も矩形で玄門などもはっきりとしたものになってくる。II期の古墳は、高く大きな墳丘を造る意識の残る時期に、前庭が加えられたものといえる。

この時期の古墳の築造は、限定された古墳群の限定された階層に、定型的な台形の前庭という型式をもっておこなわれたのである。

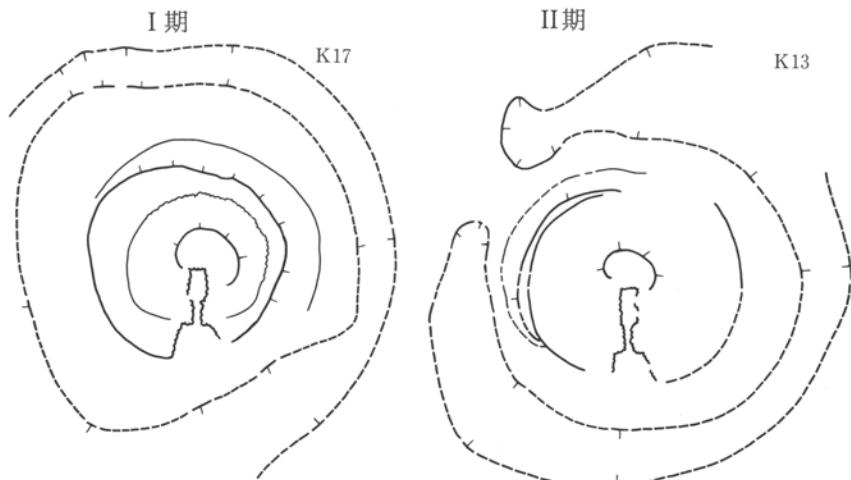
**III期** III期にはいると、各古墳群で古墳の築造が再開される。この段階でも墳丘20m以上の古墳や玄室が300cmをこえるなど、小円墳の中では規模の大きなものが造られる。墳丘20m以下のものでも、これに近い規模の古墳が数基程度各古墳群にある。古墳群を形成する階層の中にも、従来のものと同様に、階層差があることがうかがわれるが、20m以下の規模などのものは少ない傾向がある。

5世紀段階から古墳群の形成がはじまっている地蔵山古墳群では、5・6世紀の古墳が造られた地点から離れた西側斜面に、III期の古墳が造られる。蟹沼東古墳群でも古墳が集中する地点から離れ、北・南側で造られる。各古墳群の中で、古墳築造の場所がこの時期には変わるのである。

二之堰古墳群などの新しい古墳群や、数基で群をなすものなどがあらわれるようになる。また、最近の発掘調査によってわかってきたのだが、単独で造られる古墳が登場する。筆者はこの単独の古墳を、「散在する古墳」として注目してきた。<sup>\*15</sup>従来の古墳群形成とは違った古墳占地が、この時期からはじまることになる。

周堀は全周するが不整形なものになる。30mをこえる規模の古墳はない。

前庭は、周堀と同じ底面かさらに掘りこむものになる。周堀と前庭が結びついた形のものと、前庭と「けつ」状の周堀が結びつかないものとがある。



II期までは、前庭・羨道・玄室とフラットにはいる型式だったが、III期では、前庭から一段上がつて羨道に達する型式になる。前庭の底面に河原石を石敷状に設置するものもある。羨門袖壁は左右に長くなり、羨門袖側壁は短くなる。前庭の掘りこみも、隅丸の台形を意識している。羨門袖側壁を省略したものが蟹沼東古墳群以外の古墳群にあるが、前庭の平面形は羨門袖側壁のあるものと同じ隅丸の台形を意識した造りかたをしている。形の上では、I期にあった羨門袖壁で平坦なテラスを設けるものと同じである。

この型式は地蔵山古墳群では、20m規模のある赤堀村3・4号墳で羨門袖側壁があり、20m以下 の漏五目牛5号墳と赤堀村19号墳で羨門袖壁だけである。西原古墳群では、F2・4号墳は20m以上でD1号墳は17.3mで、羨門袖壁だけである。二之堰古墳群では、13m規模の14号墳にごく短い羨門袖側壁があるが、22.6mの4号墳は羨門袖壁だけである。古墳群の中に、羨門袖壁だけのものがあるかどうかは、古墳群の個性と考えられるが、蟹沼東古墳群のものを考えあわせれば、羨門袖側壁をともなうものが本来的に規模の大きいものに採用されていることはいえよう。

蟹沼東古墳群の石室構築では、地山を整地し石室の壁を積みあげながら墳丘を積みあげる方法を大半の古墳がとっていたが、この時期からはすべて地山を掘りこんで竪穴を造り、ここに石室の壁を積みあげる簡略な方法がとられる。玄室も矩形の定型的なものになり、角礫を立てて玄門としている。

III期は古墳群の中で、古墳の占地が変わる、新しい古墳群が生まれる、前庭の型式が変わる、古墳築造のすべてにわたり簡略化の傾向があらわれてくるなど、大きな変化がある。

**IV期** この時期にはいると、周堀の全周するものはなくなり、円を意識して部分的に掘るものと、部分的にだけ掘るものなどになる。墳丘が30mに達するものはIII期以降なく、この段階では20mを越えるものが数基だけである。全体として、墳丘の縮小化が進んでいる。周堀はこの段階で、墓域を区画する役割を失い、石室を覆う程度の墳丘にするための土取り場になったのである。

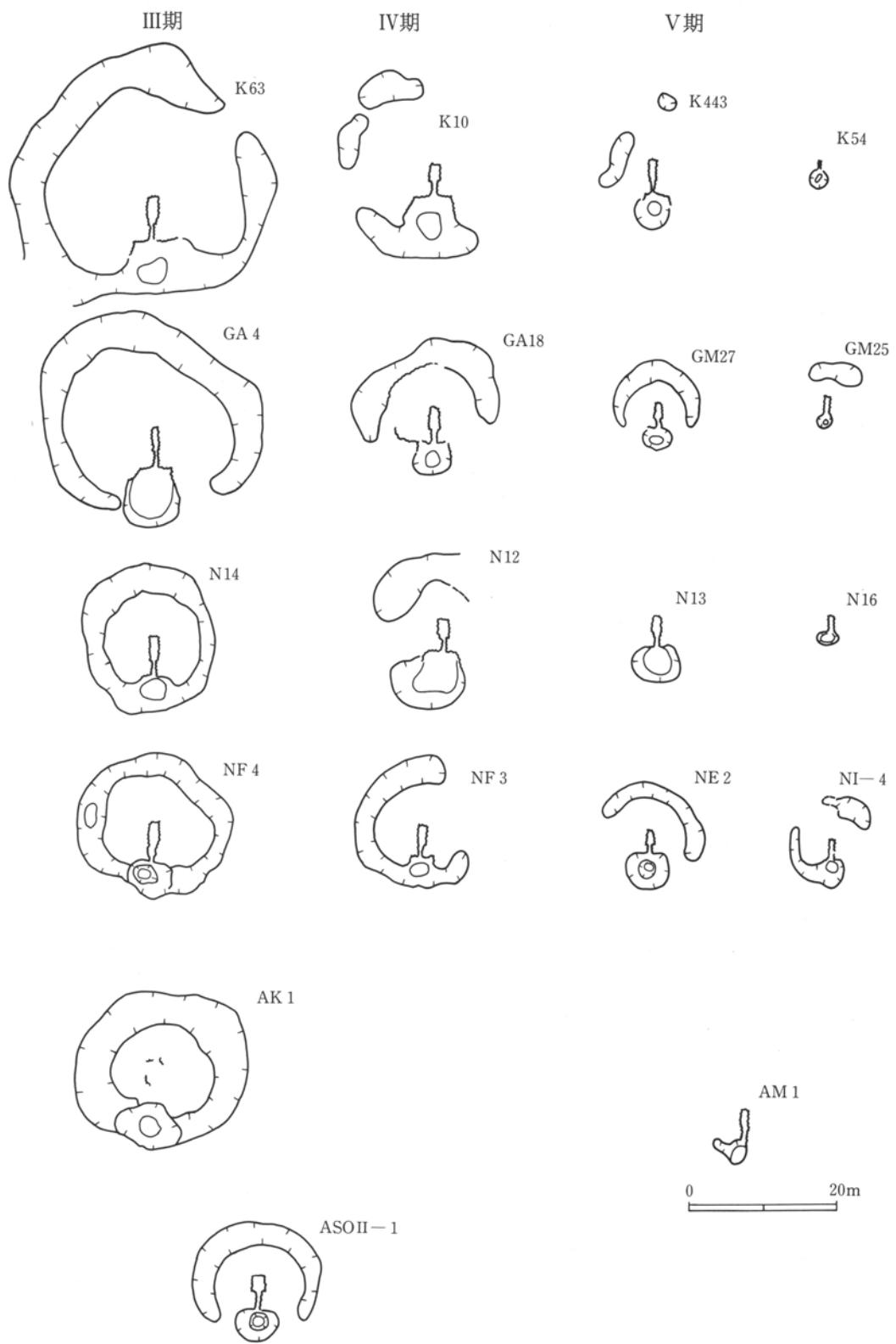


図7 前庭と周堀の型式編年 (英数字は古墳群とNoを示す)

前庭の掘りこみは、III期で部分的にあらわれていたが、周堀から分離された明瞭なものになる。前庭掘りこみの底部は、隅丸の台形・方形を意識したものになっている。また、前庭だけを深く掘りこむものもあらわれる。この場合、深く掘りさげた底部に土器が検出されるものや、焼土が検出されるものもある。前庭が深く掘られ、土器がおかれた後、一気に埋めもどされているものもある。これらの遺物や遺構の様子は、前庭祭祀をうかがわせるものである。

羨門袖側壁をともなうものと、羨門袖壁だけのものもある。二之堰古墳群では両者があり、墳丘・石室とともに規模の差はみられない。西原古墳群では、羨門袖側壁がつくものは1基だけであるが、その差異は羨門袖側壁の有無以外に特別みられない。地蔵山古墳群では、石室が300cm前後のものに羨門袖側壁があり、石室200cm前後のものは羨門袖壁だけという差異がある。このことは、蟹沼東古墳群でも同様の差異としてみることができる。V期にはいると、羨門袖側壁があるのは、二之堰古墳群で1基と地蔵山古墳群で2基あるだけで、省略の方向がはっきりとしているから、前庭の簡略化したものとして小古墳にとりいれられていったものなのだろう。前庭の形でも、小古墳の中のやや規模の大きいものと、小さいものとで差異がみられる古墳群もでてくる。

玄門は角柱状の立石のものが多くなる。玄室の形状も石室比1.7のものもあらわてくる。墳丘の縮小化が進むことは、前述したとおりであるが、石室の規模300cmのものと100~200cm代のものとに分化してくる。地蔵山古墳群ではとくに顕著にこのことがみられ、玄室300cmをこえるのものは、占地の面でも新しい地点に拡大するなど、違った在り方を示している。III期では墳丘20m・玄室300cm以上のものが多かった。これは7世紀前半での古墳築造に加えられていた規制がとかれ、各古墳群で再び古墳築造がはじまり新しい古墳群がつくられたりするなどの動きがあり、こうした中での古墳築造階層が、小古墳をつくるものの中でも大きいものをつくる階層であったことを示しているのかもしれない。IV期では、さらに下位の階層まで、古墳築造するようになったことになる。

**V期** 周堀のないものが多くなり、あるものでも浅く掘られるだけで、前庭のみ掘るものが大半になる。前庭の掘りこみも、台形を意識したものはなくなり、円形に浅く掘られるだけである。墳丘規模も20mをこえるものはなくなり、墳丘も高いものはなかったと思われる。地蔵山古墳群でこの時期の4基は、すべて『上毛古墳綜覧』の調査漏で、古墳群の全面発掘調査によって発見されていることが、高い墳丘のなかったことを裏付けるものになっている。羨門袖側壁をともなうのは、二之堰古墳群の1基だけで、すべて羨門袖壁と掘りこみだけで前庭としている。

玄室は300cmをこえるものはなくなり、200cm前後かそれ以下のものが大半になるが、横穴式両袖型石室の型式は保たれている。奥壁の石以外は小ぶりなものが使われるようになり、その分だけ玄門が角柱状のはっきりしたものになる。一方、こうした横穴式両袖型の型式を保つものと、石室機能が退化・簡略化され石櫛状のもの・形態的には袖無型に近いもので成人を埋葬することや追葬が困難なものなどの二者に分類できる。この両者の関係を、どのようにみるのか議論のあるところである。後者を前者の簡略型式としてみるとすれば、一つの時期を設定することができ

る。しかし、III期、IV期と古墳群の中で階層化がすすんでいることの延長線上に考えれば、現時点では階層差と考えておくのが妥当であろう。

前者と後者を占地の点でみると、地蔵山古墳群では横穴式両袖型の型式を保っているものが、古墳群の西でIII期とIV期に新しく占地を拡大した古墳のそばに、退化した袖無式のものは墳丘10m前後の古墳がある中央部分に位置する。前者が比較的ゆったりとし墓域をもつのに対し、後者はより限定されている。蟹沼東古墳群でも同様の傾向がうかがえる。こうしたことは、横穴式両袖型の型式を保ったものと、袖無式に退化したものの差は、階層差と考えることが妥当であることを傍証するものになる。

V期では、墳丘・周堀・前庭・石室と古墳を構成する諸要素のすべてが、簡略化・縮小化が進み、ついには前庭と石室だけになり古墳築造の終わりとなるのである。

#### I～V期のまとめ 分析の結果次のようなことがわかった。

周堀の機能は、周囲から特定のものの墓である範囲を区画すること、封土の採土場の二つにあつたと考えられる。周堀はI・II・III期で円形にめぐるが、III期では不整形なものになり、前庭と合体するものもでてくる。なお、前庭と周堀をつなげるもの・前庭を周堀から独立させているものの両者の前後関係は、現状ではわからない。IV期では周堀が全周するものはなくなり、区画するという周堀の役割はうすれて、封土の採土場としての比重が増えることになる。V期では墳丘の小型化とともに、前庭かわずかな堀の掘削だけで、大半の周堀がなくなっている。

前庭はその型式を変化させながら、7世紀代をとおして古墳祭祀には欠かせないものになる。前庭の型式変遷をみると、赤城山南麓の発掘調査されている「掘りこんだ前庭」をともなう古墳は、III期以降の古墳ということになる。この段階では、6世紀末から7世紀初に導入されたI期の型式も、墳丘の縮小化や周堀の簡略化・石室を掘りこんでつくるなど、変質と簡略化の流れの中にあったことがうかがえる。V期にいたって古墳の築造も終わるのである。

I期では主に蟹沼東古墳群で古墳がつくられるが、その後古墳築造は断絶する。にもかかわらず、断絶から再び古墳築造をはじめるII期では、I期からの型式的断絶はない。II期で古墳築造が再開されるのは蟹沼東古墳群だけで、伝統的古墳群ではないが突出して古墳がつくられる。III期でほかの古墳群でも広範に古墳がつくられるが、古墳群内での占地の変化や、新しい古墳群の成立など今までになかった動きをみると、約半世紀間の古墳築造の断絶の意味は極めて大きいものであることがうかがえる。

またIII期以降の型式変化が、6世紀代の横穴式石室受容期にみられたような、つまり両袖型・狭長な袖無型・両者の交じりあったものなど、各古墳群での石室に象徴された型式のバラエティーがなく、周堀と前庭の変化をはじめとして、石室では定型的な矩形から小型化しやがて石櫛状のものに変わること、墳丘の小型化などが、齊一に変化していくことが指摘できる。

少なくとも赤城山南麓一帯で各古墳群の個性はあるが、型式は同じものである。こうした流れの中で、7世紀前半の時期の古墳がスッポリと抜け落ちていた。

この地域に、古墳築造が断絶したことは、他の時期にはないのである。5世紀後半以来おこなわれてきた群集墳築造とその祭祀が、この断絶をはさんで、変質していくことがうかがえるものになっている。そして、このI～V期区分の中で、7世紀前半にみられる古墳築造断絶と7世紀中葉における圧倒的な再開は、政治体制あるいは墓制、地域構造の変質などをうかがわせるものである。

約半世紀間の断絶とは何であるのか。

## 5. 赤城山南麓における古墳群の動向

前章で蟹沼東古墳群でのI～V期区分による編年が、赤城山南麓の他の古墳群にも適用できることが明らかになり、6世紀末～7世紀初以降の古墳築造断絶期が指摘できた。一方、7世紀中葉以降の古墳築造は、爆発的な増加を示し、この地域総体としては6世紀代を上回る質と量をもっていることを概観した。そこで、赤城山南麓の発掘調査されている古墳群で、報告書が刊行されているもの、報告書は未刊であるが全体図などで前庭をともなう古墳がわかるものをとりあげて、古墳築造断絶と復活の様相を検討してみよう。その時期などの詳細な検討は現段階では不可能であるが、前庭をともなう古墳は7世紀中葉以降の蓋然性が高いものとして考え、各古墳群で、前庭をともなわないもの（6世紀後半まで）、前庭をともなうもの（7世紀中葉以降）にわけ、7世紀前半の古墳築造断絶の現象を軸に、古墳群の変遷を5つのパターンに分類してこの地域の古墳群の動向を探ってみた。各古墳群の後ろの（）内の、漢数字は6世紀後半までの古墳基數、算用数字は7世紀中葉以降の古墳基數を示している。なお、古墳基數の後ろの「？」マークは、全体図を検討しての判断であることを示している。古墳基數は円墳の数を示している。

Aパターン：7世紀前半の断絶をはさんで古墳築造を再開する古墳群

赤堀町地蔵山古墳群	(二八基・15基)
伊勢崎市蟹沼東古墳群	(三九基・30基)
前橋市阿久山古墳群 <sup>*16</sup>	(一八基？・20基？)

Bパターン：7世紀前半の断絶でほぼ古墳築造を停止する古墳群

赤堀町峯岸山古墳群	(二九基・1基)
前橋市天神古墳群 <sup>*17</sup>	(四二基？・1基？)
前橋市伊勢山古墳群 <sup>*18</sup>	(一五基？・1基？)

Cパターン：7世紀中葉以降新しく形成される古墳群

前橋市二之堰古墳群	(0基・21基)
前橋市谷津古墳群 <sup>*19</sup>	(0基・10基)
前橋市熊の穴古墳群 <sup>*20</sup>	(0基・17基)
粕川村西原古墳群	(一基・14基)

Dパターン：数基であたらしく古墳築造をおこなうもの

前橋市諏訪西遺跡	* <sup>21</sup>	(0基・3基)
前橋市柳久保遺跡	* <sup>22</sup>	(0基・4基)

E：単独でつくられるもの

前橋市荒砥下押切II遺跡	* <sup>23</sup>	(0基・1基)
前橋市荒砥北原遺跡	* <sup>24</sup>	(0基・1基)
前橋市荒砥宮田遺跡	* <sup>25</sup>	(0基・1基)
前橋市向原遺跡	* <sup>26</sup>	(0基・1基)

**Aパターン** Bパターンとならんで赤城山南麓を代表する古墳群であるが、前方後円墳をともないその質・量ともにBパターンをしのぐ規模や内容をもっている。7世紀の中斷をはさんで以前・以後を比較すると、現象的には中断以後の古墳が少ないが、それぞれの時間幅を考えると中断以後の古墳築造が活発だったことを示していると考えてよい。古墳群の中の占地の点でも以前のものと以後のものでは、はっきりと違ったものになっている。地蔵山古墳群では、III期以降の築造は古墳群の西側に新しい占地を比較的ゆったりとおこなうものと、6世紀後半までの古墳の間にあるわずかな空間につくられるものがある。前者は、20mを越える古墳・石室200cmを越える古墳などで、後者は古墳のわずかな空間に造られる規模の小さい古墳との間に差がみられる。蟹沼東古墳群でも同様な様相がみられる。

II期で古墳が造られるのは、蟹沼東古墳群だけである。この古墳群は、前方後円墳・帆立貝式前方後円墳もないが、7世紀代の古墳築造が質・量ともに群をぬいでいるなどのこともある。この古墳群の性格を検討する時に留意する点である。阿久山古墳群でも、6世紀後半までのものが集中する北側と、若干離れて南側に集中する7世紀のものと占地が明瞭に違ったものになっている。

このパターンの古墳群は、赤城山南麓の中で、周囲を広い水田に囲まれた流れ山にある。

**Bパターン** このパターンは、Aパターンとならびこの地域の中でも質・量ともに地域を代表するような古墳群で、前方後円墳や帆立貝式古墳も含むものである。また、天神古墳群は『上毛古墳綜覧』の古墳分布調査によると、荒砥地域の中で最も密集度の高いものであった。発掘調査によっても、天神山という流れ山の斜面全域が古墳で覆いつくされていた。また、これらの古墳群の場所は、周囲を本地域の中でも広い水田地帯によってかこまれ、発掘調査によっても4世紀以来の古墳時代居住域が古墳群の周辺で確認されている。このパターンでみられる7世紀代の古墳築造の急速な衰退が、生産域が壊滅してしまうような自然災害によるもの、あるいはそれを推測させるような発掘調査の結果は、古墳群周辺での台地・沖積地のいずれにおいてもみられない。

**Cパターン** 西原古墳群は6世紀末～7世紀初の帆立貝式古墳の1基をのぞいて、前庭をともなっているのでこのパターンにいた。帆立貝式古墳は、古墳築造が断絶される直前のものと考えられる。こうした古墳群は、A・Bパターンのように低平で広い沖積地や水田のある地点の中の流れ山にあるのではなく、さらに奥まった谷戸田となった地点や低台地から標高をさかのぼり

丘陵性の台地に近い地点に立地している。こうした地点は、農業生産地域の縁辺部や中心部であっても粗密な地域ということになる。古墳群立地の点では、A・Bパターンと対照的な在り方を示している。

**Dパターン・Eパターン** Cパターンに類似するが古墳基數が少ないと、やや立地が違っていることで別のものとして分類した。Cパターンの立地は、この地域の生産域中心部の縁辺部で、丘陵性台地や谷戸田にのぞんだ立地であった。この地域での古墳分布をみると、古墳が集中してみられるのは阿久山・伊勢山・天神古墳群などのある所で、水田地帯の中に流れ山も多くみられる場所である。一方、荒砥川の左岸では古墳の集中はみられず、D・Eパターンの古墳分布がみられるだけである。その立地はCパターンに近いが、荒砥川の氾濫原にあたる広い沖積地と微高地があることが異なる。これらの古墳の分布する地点の発掘調査によって、4世紀以来古墳時代全般の居住域となっていることが確認されている。居住域として、また生産域としてもその存在が確実視されるところであるが、古墳の分布がなかった場所ということになる。しかし、III期にはいると古墳の築造がはじまるのである。EパターンとDパターン両者の違いは、古墳が数基集まっているのか、単独であるのかだけである。D・Eパターンの古墳がある場所は、水田地帯が広くある地点の周辺で、小規模な谷の奥まったところや谷頭に近い地点である。

**A～Eパターンのまとめ** このようにみてくると、その地域の中心となる地点には、A・Bパターンの古墳群がみられ、この周辺地帯になるとCパターン、そしてD・Eパターンがみられる。赤城山南麓の古墳群の各々がどのパターンに属するかは、発掘調査を経なければわからないが、低平な広い水田地帯のある地点にはA・Bパターンが分布し、広い水田地帯となるには制約条件の多い地点や谷の奥まった地点、谷頭などの場所にC・D・Eパターンが分布するのである。発掘調査が進められると、C・D・Eパターンの古墳が増加していくことが推測できる。A・Bパターンの伝統的な古墳群でも、二之堰古墳群などCパターンの古墳築造数をこえるのは、蟹沼東古墳群だけである。Bパターンのように1期を除いて古墳築造をほぼ終了するものもある。一方、C・D・Eパターンの古墳群が急速に分布を拡大していくのである。また、この古墳築造拡大が極めて大きいもので、古墳時代のどの時期と比較しても最大規模のものであった可能性がある。しかも、古墳築造の断絶をはさんで、古墳の型式とその変遷が齊一的なものとなる傾向があるなど、注目すべきものとなっている。

これらのことは、伝統的勢力の中でも勢力の変転・後退があり、今まで古墳を造らなかった勢力が造るということは、その生産基盤が従来のものと違ったものが出てきているのかもしれない。6世紀後半までの、前方後円墳を頂点としたヒエラルキーとは別の支配原理が、7世紀前半の古墳築造断絶をはさんで、7世紀中葉以降の古墳築造と古墳群形成を律していたことをうかがわせるものである。<sup>\*27</sup> 別の支配原理とは律令的なものと理解されているが、その具体的な様相はいまだ明らかになっている訳ではない。律令的な支配体制が、各地方においてどのように展開し、成立をみていったのかを明らかにすることになる。

筆者の言う新しい勢力の動きは、C・D・Eパターンに象徴される新しい地点での古墳の築造となってあらわれる。おそらくその背景には、生産体制の変質とその象徴としての新しい生産構造の掌握というものがあるだろう。こうした地方の律令支配の様相を集積していくことが、都の律令体制への変化の姿をより鮮明なものにしていくのだろう。

今後は、実際に各地の古墳群でどのような展開をしているのかなどの検討に、本格的に着手されていくことが必要になる。

### おわりに

本稿では、荒砥地域の古墳時代分析の一環として、赤城山南麓における7世紀代の古墳の編年のために、前庭の型式をI～V期分類の提示と、この編年によって赤城山南麓の7世紀代の古墳群の動向をさぐることにとどめた。

今回蟹沼東古墳群の編年をさらに細かく改訂したが、今後さらに検討を加えて詳細なものになるとともに、本稿で指摘できた問題点の検討を図っていきたい。また、他地域で、7世紀代の古墳がどのような展開を示すのかなどの検討も目指したい。そして、こうした墓域の検討とともに、この地域の居住域や生産域の分析と照らし合わせ、地域の全体史を追究する方向を探りたい。

なお、本稿をまとめるにあたり、能登 健氏に指導と助言をいただき、坂口 一・徳江秀男・小島純一の三氏に土器・埴輪などの年代検討に協力いただいた。図版の製作では、新井悦子氏の手をわざらわせた。記して、感謝いたします。

### 註

- (1) 群馬県史跡名勝天然記念物報告書『上毛古墳綜覧』1938
- (2) 前橋市教育委員会『前橋市埋蔵文化財調査地一覧表』1992
- (3) 鹿田雄三「赤城山南麓における群集墳成立過程の分析—群馬県伊勢崎市蟹沼東古墳群を中心にして—」群県埋蔵文化財調査事業団『研究紀要』10 1992
- (4) 右島和夫「古墳から見た6,7世紀の上野地域」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集1992  
鹿田雄三「利根・沼田の古墳分布」群馬県埋蔵文化財調査事業団10周年記念論集『群馬の考古学』1988
- (5) 佐波郡赤堀村教育委員会『地蔵山の古墳1・2』1976・1977
- (6) 佐波郡赤堀村教育委員会『峯岸山の古墳1・2』1975・1976
- (7) 伊勢崎市教育委員会『蟹沼東古墳群・宮貝戸遺跡』1978  
伊勢崎市教育委員会『蟹沼東古墳群』1979  
伊勢崎市教育委員会『宮貝戸古墳群・蟹沼東古墳群』1980  
伊勢崎市教育委員会『蟹沼東古墳群』1981  
伊勢崎市教育委員会『蟹沼東古墳群』1987
- (8) 勢多郡粕川村教育委員会『西原古墳群』1985
- (9) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥二之堰遺跡』1986
- (10) 松本浩一「横穴式石室における胴張りに関する一考察」『古代学研究』No53 1968  
松本浩一「関東地方の後期古墳」『考古学ジャーナル』No194 1981  
松本浩一「終末期古墳の石室形態」『奥原古墳群』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- (11) 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群IV』 1993 12 注3参照
- (12) 注(3)参照
- (13) 赤堀村教育委員会調査による古墳の正式名称は、『上毛古墳綜覧』記載赤堀村4号墳であるが、赤堀村4号墳と略称し、発掘調査によって発見された『上毛古墳綜覧』記載漏五目牛5号墳の略称は、漏五目牛5号墳とする。峯岸山古墳群のものも同様に、峯岸山12号墳、漏峯岸山1号墳と略称する。

- (14) この表では、墳丘20mの規模で分類した。これは蟹沼東古墳群の分析により、20m前後で埴輪・葺石の有無、石室構築法などに差異が認められたことによる。また墳丘20mをこえる規模のものには、玄室300cmをこえるものが多いので、墳丘20m以下のものでも玄室300cm以上のものは20mをこえるものに分類した。
- (15) 鹿田雄三「群集墳研究の現状をめぐって—後期小古墳の成立とその背景についての新しい分析—」群馬県埋蔵文化財調査事業団『研究紀要』2 1985
- (16) 群馬県教育委員会『下境I・天神』1990
- (17) 群馬県教育委員会『下境I・天神』1990
- (18) 群馬県教育委員会『阿弥陀井戸道上・伊勢山・大道・山王・明神山』1989
- (19) 群馬県教育委員会『荒砥北部遺跡群発掘調査概報』1986
- (20) 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群I』1990  
前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群II』  
前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群III』1991  
前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群IV』1992  
前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群V』1992  
前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群VI』1993
- なお、この遺跡群では熊の穴古墳群17基、上横俵古墳群26基の調査をおこなっているが、両古墳群を一つの古墳群としそれぞれを支群として理解することもできるが、とりあえず報告書に従って二つの古墳群として扱っておく。
- (21) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報』3 1983
- (22) 群馬県教育委員会『荒砥北部遺跡群発掘調査概報』1985  
前橋市教育委員会『柳久保遺跡群V』1988  
前橋市教育委員会『柳久保遺跡群VI』1988
- (23) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報』2 1982
- (24) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥北原遺跡』1986
- (25) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報』3 1983
- (26) 群馬県教育委員会『上西原・向原・谷津』1986
- (27) 前掲註4・右島論文  
能登 健・右島和夫・関口功一「古墳王国群馬の実像を求めて」『群馬県民の歴史1原始・古代』1993